

第6学年 国語科の実践

- 1 単元名 登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう
教材名 『海の命』 立松和平 作

2 単元目標

- 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を叙述から読み取り、考えたことを交流し合って自分の考えを広げたり深めたりする。
- 「いのち」シリーズの並行読書をし、読み比べることにより、作者の「命」に対する思いを考え、人間の生き方についての考えを深める。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識をもち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成」

手だて…子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり

ブロックテーマ…「仲間への共感(理解)、自立する自分」

・仲間に共感しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿

まずは自分なりの考えをもつことの大切さを伝え続けるとともに、考える時間を確保することを心がけてきた。

聴く・話すことに関しては、「まずは聴く」ことの大切さを指導してきた。また、教師の発問や友達の考えに対して黙って聴いているだけではなく、自分の考えと比べながら聴いたり、わからないことを訊き返したり、思ったことを伝えたりするよう促している（「聞く」から「聴く」・「訊く」へ）。友達の考えに対するあいづちやよいつぶやきを取り上げたり褒めたりすることで、少しずつではあるが自分の思いをつぶやくことができる子どもが増えてきた。

関わり合い・ひびき合いに関しては、わからないことをペアやグループで教え合ったり、友達の意見がわかりにくかったときには言い換えさせたりすることで、関わり合いが見られるようになってきた。友達の考えを大切に、ノートに記す子どもも増えてきた。しかし、全体での話し合いでは、話し手の相手意識や聞き手の受容的・共感的姿勢にまだまだ課題がある。後期に入って取り組み始めたフリートークでは、相手意識をもって話したり友達の意見につなげて考えたりする場面が少しずつではあるが見られるようになってきた。

4 単元と指導

①単元について

本単元は、学習指導要領5・6年「C 読むこと」の目標「目的に応じ、内容や要旨を捉えながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」を受けて設定されている。また、その内容「エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめる」ことや「オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりする」ことを指導するのに適した単元である。

本教材は、父を亡くした主人公太一が、迷い、葛藤しながらも自分を取り巻く人物との関わりの中で漁師としての生き方や海に対する考え方を学び、成長していく姿が描かれている物語である。6年生になり、命や人間の生き方・考え方については他単元や他教科・道徳等でも折にふれ扱ってきたが、本教材は小学校で学習する最後の物語文であり、卒業の時期を迎える子どもたちが、自分の生き方を考える上で大変意義深いものであると言えるだろう。子どもたちが作品にじっくりと向き合い、自分自身の生き方を見つめ直すきっかけとなるのに適した教材であると考えられる。

物語は、主人公太一の少年期から始まり、青年、壮年になるまでの生涯が一行空きによって6つの場面で構成されている。起承転結の場面展開がはっきりした構成であり、この構成を捉えることは、作品の山場や太一の生き方・考え方、主題を読み取る助けとなるだろう。また、作品には、主人公の少年の生き方に影響を与える人物が複数登場する。彼らの言動から心情を想像するとともに、人物の相互関係をつかませたい。それぞれの場面を貫くものは、一人の少年の海に対する思いであり、父の死を乗り越え、父をしのぐ漁師を目指す成長の姿である。

1 1月後半は校内読書週間であった。この機会を生かし、単元の導入として作者立松和平氏の「いのちシリーズ」の一つ、「山のいのち」の読み聞かせを行った。「いのちシリーズ」を読むことで、より深く作者の思いを感じ、「海の命」を読み深めていくことができるのではないかと考えた。

②指導について

【切実な問題について】

この物語は、主人公太一の心情に寄り添いながら読み進めていくことになる。まず、太一の心情の変化（成長）を読み取るという単元を貫く学習課題を設定し、父や与吉じいさの言動から、海に対する考え方や漁師としての生き方を学び、成長していく姿を読み取らせたい。

また、父の敵である瀬の主をずっと追い求めてきたのに、いざ瀬の主に出会ったとき「太一はなぜクエを殺さなかったのか」、この点に子どもたちは強く疑問を抱くだろう。登場人物に寄り添いながら読み進めることで、太一の考え方や生き方に共感したり、自分の考えとは違うと感じたりすると思われる。子どもたちの初発の感想をもとに、一人ひとりの疑問を出し合い、みんなで話し合いたい課題（読みのめあて）を設定していく。課題を解決するために、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聴き合ったりといった交流の必然性が生まれ、子どもにとっての切実な問題として高まっていくことを期待したい。

【ひびき合いについて】

全体での話し合いが苦手な児童も多いため、まずは少人数で考えを伝え合い、自分の考えを確かなものにする場を設けるようにする。そこでの交流によって、一人ひとりの子どもに対して話す活動と聴いてもらう活動を保障していく。学級全体での話し合いでは、自分の考えとの共通点や相違点を考えながら聴くようにさせ、友達の考えにつなげて話したり友達のよい考えを取り入れたりすることができるようにしていきたい。みんなでの話し合いを通して、友達の考えを受け入れたり、新たな気付きをもつことができたりする姿を「ひびき合う姿」と考えたい。

本時では、「なぜ太一はクエを殺さなかったのか」という疑問について話し合う。太一の心情の変化をクエや父、与吉じいさの行動や言葉と関係づけて読み深めていく。太一は父の敵をとり、父を超えることこそが「本当の一人前の漁師」と考えていたが、与吉じいさが教えてくれた「海と共存する」考え方をすることが「一人前の漁師」であると気付き、クエに父の姿を重ね、クエを海の命の象徴と考えることで、海と共存し、命をつないでいく考え方に変わったという意見に近づいていけるとよい。文章を読み取る力にはかなり個人差があり、自分の考えを持つことが難しい子どもや読みが浅い子どももいると思われる。友達の考えを聴いて、自分の考えを広げたり深めたりする姿を本時での「ひびき合う姿」としたい。

5 単元構想 第6学年国語科 登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう
『海の命』 【10時間】

単元
目標

- 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を叙述から読み取り、考えたことを交流し合って自分の考えを広げたり深めたりする。
- 「いのちシリーズ」の並行読書をし、読み比べることにより、作者の「命」に対する思いを考え、人間の生き方についての考えを深める。

命や人物の生き方
について考える学習

5年：「百年後のふるさとを守る」
6年：「やまなし」
「イーハトーヴの夢」

道徳との関連

(命や生き方・考え方について考える)

- 命の授業 ○ 「プラス思考」
- あやちゃんの卒業式
- 精一杯生きよう

「いのちシリーズ」の並行読書

「山のいのち」「川のいのち」
「田んぼのいのち」「牧場のいのち」
「木のいのち」「街のいのち」

「海の命」を読みましょう。

<題名読み>

- ・海の命って魚のことかな？ ・どんな話かな？読んでみたい。

<全文通読・初発の感想交流・読みのめあての設定>

- ・どうしてクエを打たなかったのかな？ ・なんで生涯話さなかったのかな？
- ・「海の命」は最後にしか出てこない。なぜ「海の命」という題名にしたのかな？

<登場人物・文章構成・重要語句確認>

太一の心情の変化(成長)を読み取り、生き方についてみんなで考えよう。

- ・一人読みの時間を確保し、自分なりの考えをもたせるようにする。

- ・叙述をていねいに読み取り、会話や行動から心情を深く考えられるようにする。
- ・一人の人間の成長には、周囲の人間の存在が大きく関わってくることで、また、太一にとっての海やクエのように、人間の成長の過程に影響をもつ事物や事象があることに気付かせるようにする。

なぜ太一はクエを殺さなかったのか。【本時】

- ・殺したいけど殺したくない。
- ・今までにない感情を抱いたから。
- ・与吉じいさの教えるを思い出したから。
- ・おだやかな目のクエが父のように思えたから。
- ・大魚がこの海の命だと思えたから。

なぜ生涯だれにも話さなかったのか。

- ・話すことによって、他の漁師が瀬の主をうとうとし、命を失わないように。
- ・海の命を守っていくため。
- ・自分の選んだ生き方に自信があったから。

「海の命」とは何か。なぜ「海の命」という題名にしたのか。

- ・「海の命」とは「海のめぐみ」のこと。漁師は海に生かされている存在。必要以上にとり過ぎてはいけない。共存していくことが大切。
- ・「海の命」とは「守るべきもの」。人間が独り占めしようと欲張ってはいけない。自然と共に生きていくことが大切だと伝えなかったんじゃないかな。

「父」「与吉じいさ」「太一」の生き方についての考えを交流し、深め合おう。

- ・与吉じいさの生き方がすばらしいと思う。海の命を少しだけいただくという漁のしかたを貫き、太一に伝えたから。
- ・太一は父のかたきをとろうとしてクエを追い求めたけれど、実際に出会ったとき、クエも海の命だと気づき、かたきうちという考えを捨てたのが立派だと思う。

6 本時について

- (1) 本時目標 太一がクエを殺さなかった理由を叙述から考え話し合うことにより、太一の心情の変化について読みを広げたり深めたりする。
- (2) 本時展開

学 習 活 動	主な支援・留意点【評価】
- 本時のめあてを確認する。 - 学習場面（第5場面）を音読する。 - 少人数で考えを伝え合い、自分の考えを確かなものにする。 - 全体で考えを伝え合い、話し合う。 海の命を守る ＝与吉じいさんの教え 殺さなければいいけど、おとうは死んでしまった。おとうのすけがなくなるとわづらひに来そうだから、おとうを殺したい。 おとうとおとうさん… 変 化 おとうのかたきをうぶたいくえを殺さない 迷い葛藤 かたき なぜ太一はクエを殺さなかったのか	・太一の言動や様子に気を付けながら音読させる。 ・話し合いが苦手な児童が多いため、まず少人数（２～３人）での伝え合いをすることにより、抵抗を減らすようにする。 ・考えの似ている人からつなげて発言できるようにする。 ◆叙述を根拠に、太一の心情について考え、進んで自分の考えを伝えたり、友達のを聴こうとしたりしている。【関心・意欲・態度】 ◆太一の言動や様子に着目し、心情の変化を読み取っている。【読む】

7 実践を終えて

○切実な問題・ひびき合いについて

子どもたちの初発の感想から、疑問に思ったことの中で全体で解決したいことは何かを話し合い読みのめあてを設定したので、友達と考えを伝え合い読み深めることは子どもたちにとって切実な問題であったと考える。また、一人読みの時間を確保したことで、自分なりの考えをもって話し合いに臨むことができた。

本時ではまず、クエの存在が「かたき」から「おとう」「海の命」に変化したことを確認し、太一がクエを殺さなかったのは「おとうだと思ったから」という子どもの考えから話し合いを始めた。似たような考えから出させることで焦点が絞られ、自分の考えに自信をもって話す子どもの姿が多く見られた。また、「本当にクエのことをおとうだと思っているのかな」と教師が投げかけ、「こう思うことによって」という叙述に目を向け、「本当にクエのことをおとうだと思っている訳ではない」という子どもの考えを出させることにより、読みの浅かった子どもたちは読みを深めることができた。

自分の考えを伝え合う際には、友達の考えに反応したり、関連させて自分の考えを出したりすることにまだまだ課題が残る。また、自分の考えを「読む」のではなく、自分の言葉で「話す」ことも高めていきたい力である。しかし、読みの浅かった子どもたちが話し合いを通して読みを深めることができたので、そうした姿は「ひびき合った姿」と捉えてよいのではないかなと思う。話し合いの後のふり返りからは、自分の考えに自信をもったり、友達の考えに影響を受けて自分の考えを広げたり深めたりすることができた姿を見取ることができた。

○成果と課題

<成果>

- ・子どもたちの初発の感想から疑問に思うことを全体での読みのめあてに設定することで、切実感が高まった。
- ・一人ひとりが自分なりの考えをもって話し合いに臨むことができた。
- ・叙述を根拠に挙げて自分の考えを話すことができ、自信をもって話す姿が見られた。

＜課題＞

- ・自分の考えを進んで話し合いの場に出したり、自分の考えをどこで出すべきか出どころを捉えたりすることには課題が残る。
- ・自分の考えを「読む」のではなく、自分の言葉で「話す」ことができるようにしていきたい。